

リバウンド

最近、以前アトピー性皮膚炎の取材で何度か会ったことのある新聞記者と再会した際に、10年ほど前のアトピー性皮膚炎治療の混乱期と昨今の比較が話題となった。ふっと「そういえば、最近アトピー性皮膚炎の領域でリバウンドという言葉が聞かなくなったと思わない？」と尋ねたところ、「そういえばそのとおりですね。最近、高血圧とかダイエットの領域でしか使いませんね」との回答を得た。

まず、アトピー性皮膚炎の領域でなぜリバウンドと呼称される現象が減ったのだろうか。素直に各種ガイドラインなどが普及してステロイド外用薬の適正使用が行われているとか、悪質なアトピービジネスが衰退したかといってしまうえばそれまでであるが、現在でも10年前より減ったとはいえ、入院を要する重症患者の数は少なくない。

これまで私は「アトピー性皮膚炎患者におけるステロイド外用薬中止時のリバウンドと呼ばれる現象は、治療の中断、放棄による急激な悪化であり、ステロイド外用薬特有の欠陥ではない」と主張してきたが、いまでもその考えに変化は無い。最近でもなんらかの理由でステロイド外用薬の使用を中止、徐々に悪化させ入院を要するほどに重症化する患者は存在するが、かつてほどの急激な悪化ではなく緩やかな悪化である。

かつてのリバウンドの本質は、ステロイド外用薬を止めたという治療放棄に加えて、その際に使用された、超酸性水(超酸化水)、イソジン消毒、NSAIDs含有軟膏の刺激もあり、さらに急激な悪化をみたのではないだろうか。現在は、アトピー性皮膚炎の治療に超酸性水(超酸化水)やイソジン消毒を本気で患者に勧めている医師はほぼ絶滅したと思うし、NSAIDsの含有軟膏の東の横綱であるアンダーム軟膏の販売も中止に至っている。

読者のうち、皮膚科医経験10年未満の人は、なぜ炎症が十分に治らない状態で治療を中断するような愚挙が日常的に行われていたのか素直に疑問に思っている。それは、残念なことに皮膚科医の中で「アトピー性皮膚炎はステロイド外用薬の使用によりかえって悪化し、その使用を一定期間中止することで、一旦は悪化したとしてもアトピー性皮膚炎は完治する」と主張した人たちがいたことによる。その医師の主張を信じれば誰でもステロイド外用薬の使用をやめるだろう。そしてもっと罪深いのは、そのような突拍子もない意見は自分にはにわかには信じがたいが、ちょっと面白そうだから学会のシンポジウムなどでステロイド使用派と論争させてみようなどという企画を組んだ人たちである。

「ステロイドバッシング」を許したことは日本の皮膚科の歴史的汚点である。このような過ちは2度と繰り返してはならない。

竹原 和彦

(金沢大学大学院医学系研究科皮膚科学教授)